

日蓮宗現代宗教研究所創立五十周年記念シンポジウム
平成 26 年度第 25 回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナーに参加

おやさと研究所長 深谷忠一

日蓮宗現代宗教研究所の創立五十周年記念シンポジウムが、平成 26 年 11 月 20 日に東京都大田区池上の日蓮宗宗務院で開催され、天理やまと文化会議委員の木村成人、成田道広の両氏と共に参加した。

このシンポジウムのメインテーマは「五十年後の心を考える」というもので、開催趣旨は次のとおりであった。

戦後「右肩上がり」の成長を続け、世界で有数の「豊かな国」になった我が国は、しかし、現在明らかに転換期を迎えています。

我が国の人口は、この 20 年間ほぼ横ばいでしたが、平成 22 年の 1 億 2 千 8 百万人をピークとして、徐々に減少し始めています。今後は、この減少速度が加速し、50 年後には 8 千 5 百万人となり、高齢化率（65 歳以上の人口が総人口に占める割合）は 4 割に達すると推計されています。

50 年後の人口減少超高齢化社会は如何なるものなのでしょうか。それを、豊かな心で過ごし得る、安穏な社会とするために、私たち日蓮僧侶はどうすれば良いのでしょうか。

現実には恐らく相当に困難なものでしょう。平成 24 年の宗勢調査では、檀信徒数の増減に対する質問で、「減った」が「増えた」を初めて上回り、我が宗門も退潮期に入ろうとしていることが示されました。

しかし、困難な現実の前に立ちすくんでいるのは、本化の徒の業（わざ）ではありません。超高齢化社会が訪れるのであれば、それを良き超高齢化社会にすべく取り組むのが、日蓮門下の使命であるはずで。

このシンポジウムでは、50 年後の「日本」「生命」「寺院」について、3 講師に大胆に予測して頂き、そこから見える課題に対しての建設的な提言を踏まえ、50 年後の「心」を見つめ、私たちの「今」を問い直します。

この趣旨のもと、慶應義塾大学法学部教授（元総務大臣、元鳥取県知事）の片山善博氏が「五十年後の日本を考える」、京都大学 iPS 細胞研究所上廣倫理研究部門特定准教授の八代嘉美氏が「五十年後の生命を考える」、立正大学学園理事長、上圓寺住職（元日蓮宗伝道部長）の古川良皓師が「五十年後の寺院を考える」と題して講演をおこない、その後 3 氏によるパネルディスカッションの時間が持たれた。

先ず片山氏は、先頃「日本創成会議」（座長・増田寛也元総務相）が発表した「人口減少により 900 近い市町村が消滅する」という警告は、政府の政策を都合よく進めるための地ならしという面もありそうで、100% 信頼できるかは分からない。しかし、自分が知事をしていた鳥取県でも、毎年人口が減少し過疎化していることは事実である。今、「地方創生」が新しい政策のように掲げられているが、過疎化対策は既に何十年も前から行わ

れてきている。しかし、過疎化が止まらないのは、その対策がその地方の自立のために役立っていないからである。地方の自立を考えるならば、その県（市町村）と他府県（市町村）との経済収支のバランスをよくすることが必要だ。鳥取県を例にとれば、県内の農産物を県外に売って得られるお金では、県民の生活を維持するだけのものを他県から買い入れることは到底できない。特に、鳥取県はエネルギーに関しては全面的に入超であり、それが県の経済収支を悪化させ、過疎化を進行させている。そこで、県の地勢を有効利用して、小水力発電を推し進めているが、そういう、今までにない発想による地域づくりが、これからの課題になる。そのための知的立国、教育立国を考えなければならぬ、と話した。

次いで、八代氏は、iPS 細胞研究の現状と課題を詳しく解説した上で、平成 70 年には年少人口、出生数とも現在の半分以下になる状況で、もはや古典的な「常識」に縛られていてはならないのではないか。20 世紀後半の現代は、神話的な時代である。理論的にも実質的にも、人間は機械と生物の混合体（キメラ）と化した。つまり、私たちはすでにみなサイボーグであり、それが現代人の本質であり、政略といえる。ヒトは生存したいという欲求・本能を満たすために、テクノロジーで自然や自らの身体を作り変え、完全に「一体化」しえないものを取り込みつつ生きていかなければならない。逆説的に言えば、それこそが私たちの「自然」であり、そういう新しい「生命観」を認める時がきている。つまり、あらゆる身体、あらゆる性、あらゆる生命のありかたを受容し、許容し、共生していく社会を作っていくかねばならないのではないか。長きにわたり人間の生老死によりそってきた「宗教」は、そうした新しい生命観の中でも「心の杖」となってほしい、と講じた。

そして、古河氏は、今日の仏教会の現状として、“家意識の変化と檀家制度衰退のきざし、寺離れ・葬式離れ・墓離れの三離れの進行、直葬（通夜・葬儀なし）・家族葬の増加、散骨、跡継ぎのない檀家や墓地の護り手のいない檀家が増えて、永代供養が増加し、行く末は檀家の消滅となる”という問題提起をした。そして、今後の対策として、“お寺には、必ず法華経と日蓮聖人の説く信仰や教えがなければならない。お寺は檀信徒はもとより、地域社会にとっても必要とされる存在でなくてはならない。宗派色をだすことと超宗派との狭間で使い分けの活動。公益性の発揮。高齢化社会を意識したお寺づくり。檀家制度、仏事法要、通夜、葬儀、供養のあり方、墓地、年中行事のあり方の再考。大補小の観点から、過疎地域寺院と都市部の有力寺院との連携や支援。従来の法縁とは異なる、新たな寺院関係の構築が必要だ”と語り、“宗門内の知的財産を活用して、立正安国、祖願達成というグランドビジョンを具体的に描くべしである”と説いた。

50 年後という設定は、研究所が 50 周年を迎えたという発想からだったようだが、変化の著しい現代社会を鑑みれば 50 年も先のことを考えるのは至難なことであり、3 講師ともに専門分野での現在と近未来を語るに留まったが、宗門内の参加者（100 人余）にはかなり刺激的なシンポジウムであったように感じられた。